願船坊だより

＝かけ橋＝

第33号
編集・発行
願船坊
R5年11月

親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要

今年の春、ご本山で親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要が勤められましたが、先日の十月二十一日(土)に広島北組（十八ヶ寺）でも超円寺様で勤修されました。一ヶ寺につき三名という限られた人数ではありましたが、満堂のお同行と共にお勤めさせて頂きました。広島北組十八ヶ寺のご住職方が揃ってのお勤めは実に十三年振りで、格式高く重厚な法要となりました。記念法話には、真宗仏光寺派のご住職で、テレビやラジオにもご出演されている、英月先生にお越し頂き、笑いの中にも核心に迫る、心に残るご法話をお聞かせいただきました。

先生の作られた標語を、最後のまとめのお言葉として頂きました。

『この道も　あの道も　行き詰まった
もう、道がない　と思うけど
行き詰まるのは　私の思い
道は必ず、ある』

有難いご法縁に感謝して、お参りの皆様と共に、お念仏申させて頂きました。

合掌

コーラスには願船坊からも３名参加されました♪

第三回　父と私

前々回より、父（前住職）と私のことについて、書かせて頂いております。今回は、東京に出た私と父のことです。

斉藤先生からお招きを受け、東京に出てレッスンを受けることとなりました。人生初の転校でもありましたし、また東京という未知のところに行くことが、どういうことなのか何もわからず飛び出したわけです。普通ですと親の兄弟、または親戚のところに預かっていただくと言うパターンでしょうけれども、私の場合は全く見ず知らずの、とある音楽一家のひと間をお借りして、生活のお世話をして頂きながら中学校に通い、先生のレッスンを週二回受けるという、なかなかハードな日々でした。

東京に出る前に父親からこう言われました。

「東京は怖いところだから、外を歩く時はわき目を振らず、まっすぐ前を見て歩きなさい」

この事を忠実に守ったからかどうかわかりませんが、のちに桐朋学園に進み同期の学友からは、「秋津君は電車で会って声をかけても愛想が悪かったので、気難しい人なのかと思っていたんだよ」と話してくれました。自分の本当の性格を外では閉ざしていた頃の話と、今では懐かしく思えるのでした。

《つづく》

夏供養・永代経法要

六月二十四日(土)に夏供養・永代経法要を勤修いたしました。ご講師に愛媛県大三島の万福寺より浅野執持先生にお越し頂き、講題《死を語り合う場の大切さ》についてお話をいただきました。

大切な方を亡くした喪失感を大切にする、ということは、それを語り合う事が大切なわけですね。

こんなことがあったそうです。

大崎上島にお住まいの方がご夫婦で納骨堂を見にこられたそうです。その後に、主人様が自死されたとのこと。

そのお葬儀の際にお正信偈の CD を渡されたら、これを毎日お仏壇の前で CD をかけながらお勤めをされておられたのだそうです。

その後の報恩講のお参りの際、若いご家族の方から

「お正信偈にはどういうことが説かれているのですか」

「亡くなったお父さんは今どこにいるのでしょうか」

「その死をどう受け止めたら良いのでしょうか」

とお尋ねがあったことが、先生が正信偈の絵本を作ろうとされたきっかけなのだそうです。

自分にとって阿弥陀さまのお話はどういうことか。

父の死、母の死を通して私の死を見つめていく。

ここにお念仏が重なっていく。ここが大事なのではないか。

お仏壇の前でその人の人生を語り合うということが大事なのでは。

これこそが永代経の意味合いなのではないか。

お念仏の世界は【死】に向き合っていく世界です。

【死】を避けて生きるか、【死】を見つめて生きるか。

【生死】「せいし」と一般的には読みますが、仏教では「しょうじ」と読みます。

「せいし」と読んだときは【生きるか死ぬるか】

「しょうじ」と読むときは【生まれ死に永遠に繰り返すこと】

生死［命］と受け取ることは、生まれてくる前から命があり、死んだあともずっと命がある。この全体が命というものであり、ここにこそ如来さまのはたらきを留めているといえる。

迷いの命そのままが、仏さまの「かならず救う」という〔はたらきの場〕である。

このまま終わる命ではなく、如来さまと出会わせていただく命を、いま生きている。

例えば［本］には表と裏がありますが、表があれば裏は要らないかというと、そういうわけにもいかないですね。

生死も一緒で、我々は【死】というものに裏付けされて今を生きているわけですから、【生】だけを見ているのは見えてないのと一緒です。

【死】というものを見ていくことで、私の命がどうであるかが照らされてくるのです。

仏教婦人会レクレーション旅行

九月十四日(金)、四年ぶりに仏教婦人会のレクレーション旅行を行い、仏壮の方達を交えて島根県温泉津の瑞泉寺様に参詣しました。

瑞泉寺様は、ご法座にご講師としておいでいただいている三明先生のお寺です。古くから歴史あるお寺で、立派な本堂でご住職のご法話をお聞きしました。お抹茶やコーヒーの接待まで頂き、心落ち着く時間を過ごさせて頂きました。お寺の中には妙好人として有名な浅原才一さんの直筆の口あいや、川端康成さんと親交のあった瑞泉寺の方との写真が展示してあり、大変感動しました。

お寺の近くの田んぼには刈り取った稲束を天日干しするために立てられた大きなヨズクハデがありました。ヨズクハデは大田市の有形民俗文化財に指定され期間限定でしか見られない珍しいものです。

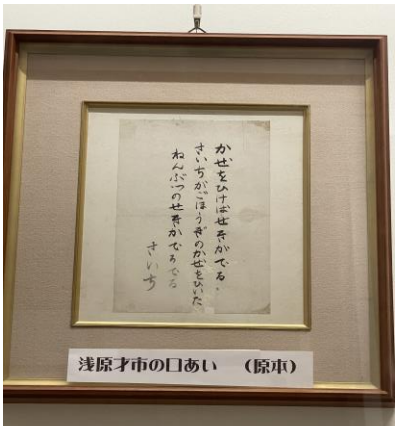
その後、石見銀山で有名な大森地区へ移動し、お蕎麦御膳の昼食を美味しく頂戴しました。食後は各自分かれて大森の古い街並を散策したり、代官所跡の石見銀山資料館を見学したりしました。出発する時は小雨が降っていましたが、現地では雨も上がり、とても楽しい一日を過ごすことが出来ました。

是非、皆様の次回のご参加をお待ちしています。

（仏婦会長　藤原政恵）

三明先生とお参りの皆様とご一緒に♪

とても大きな本堂に感嘆の声が上がりました



有名な浅原才一さんの口あい

山門も大変立派でした！

不思議な形のヨズクハデに皆さん興味津々でした

お庭コンサート＆平和コンサート

今年は久しぶりに五月のお庭コンサート、九月の平和コンサートを開催することが出来ました。どちらも久しぶりの開催となりましたが、沢山のお客様にお越し頂き、大変ありがたかったです。

お庭コンサートでは、住職のチェロ・坊守の歌・ピアニストの鹿取さんの演奏を、自然の空気感の中で楽しんでいただきました。

平和コンサートでは、チェロ六本のアンサンブルを二回公演に分けて開催いたしました。ウクライナをはじめとした昨今の世界情勢や、災害のことなど、心痛むニュースが毎日のように飛び込んでくる日々の中で、私たちに出来ることは何か、今一度平和について各自が真剣に考えなければならないのではないか、という問題提起の元、平和への願いを込めた演奏に聴衆の皆様は聴き入ってらっしゃいました。

平和コンサートでは、ハワイ・マウイ島における大規模火災により焼失したラハイナ本願寺への義援金として、聴衆の皆様からご寄付頂きました88，647円をお送りさせて頂きました。ご寄付下さいました皆様、誠にありがとうございました。

なんとかお天気に恵まれた
お庭コンサートでした♬

☆お知らせ☆

秋供養・報恩講法要（福間制意師）

十一月二十八日(火)昼席・夜席

二十九日(水)朝席・昼席

除夜会　十二月三十一日（日）夜十一時四十五分より

修正会　一月一日（月）朝十時より

御正忌法要（住職自勤）

一月十二日（金）昼席

（※昨年までと日時が違います。ご注意下さい）

《再開しています》

☆仏教壮年会　毎月第二火曜日午後一時半～三時

☆仏教婦人会　毎月十六日　午後一時半～三時

お寺のホームページです。
http://www.gansenbou.com